

I-23

東日本大震災復興を契機とした、地域の固有性・多様性に応答した地域再生の試み
 ～宮城県石巻市雄勝町における、地域・大学連携による高台移転と復興住宅の計画～
 -その 1 地域の特性と伝統的な住居の形式-

The trial of the local reproduction which answered the endemism
 and the diversity of the area beginning of the Great East Japan Earthquake revival
 -The plan of the move to a higher elevation and revival residencies which made by the local government
 (Ogatsu Cho, Ishinomaki, Miyagi) and the association of some Universities -

#1 The characteristic of the area and Form of a traditional dwelling

○佐藤太輝¹, 丹下幸太¹, 藤本陽介¹, 山中新太郎², 佐藤光彦²

*Taiki Sato¹, Kota Tange¹, Yosuke Fujimoto¹, Shintaro Yamanaka², Mitsuhiko Sato²

1. 研究背景

宮城県石巻市では、町全体での高台移転が計画されている。それぞれの浜の特徴を汲み取った造成計画が行われようとしている中で、雄勝地方特有の集落とはどのようなものなのかを研究する。

2. 研究目的

本研究は高台移転計画を行う上で、雄勝地方の特徴、または高台移転計画地の特徴を踏まえた計画とすることを目的とする。具体的には雄勝地方の歴史、風土、生活について理解を深めるために、文献調査、様々な集落の実測調査、住民へのヒアリングを行い、それらを踏まえた計画を目指す。本研究では、東北大学、東京芸術大学、立命館大学とともに行った実測調査について整理を行い、その後行った高台移転計画についてまとめる。

3. 被害状況

東日本大震災の被害は全国で 12 万 3940 戸^{*1}が全壊しており、その中でも石巻市では 4 万 4000 戸^{*2}が全壊した。そのうち雄勝地方では 1346^{*3}棟が全壊した。雄勝地方の震災後の在宅者の人数は 695 人^{*4}で、震災前の人口が 4300 人^{*5}であったのに比べ格段に少ない。浸水域は概ね海拔 20m で、高台移転計画では海拔 20m までが居住禁止区域に指定されているが、各浜毎に浸水域の規模は異なる。雄勝湾の河口付近はかつての雄勝の中心市街地であるが、湾の幅が狭くなっていくことで津波の高さが高くなり、甚大な被害を受けた。

雄勝地区人口データ	
震災前 (H23.7 月末)	震災後 (H23.6 月末時点)
人口=4,300 人、世帯数=1,637	在宅者= 695 人
	町内避難者= 190 人
	町外避難者= 210 人
	町外避難者= 211 人
	合計= 1,637 人
	死者= 122 人 (79 犠命)
	行方不明者=113 人 (79 犠命)

fig.1 被害状況^{*6}



fig.2 浸水域^{*7}

4. 地理的特徴

雄勝地方は、宮城県北東部、太平洋に面する場所に位置する。リアス式海岸の海は豊かな海産資源に恵まれており、主な生業は漁業となっている。町の面積の 80%以上を山林が占めており、平地が少ない。人家は比較的平坦地の多い雄勝中心市街地に集中し、その他は山間の極めて狭い平坦地に散在していた。今回私たちが高台移転計画を行うのは名振、船越、波板の 3 つの浜で、その位置関係は fig4 に示す。

fig.3 雄勝半島の位置



fig.4 各浜の位置関係



5. 集落の特徴

雄勝地方では北上川の支流の河口付近に中心市街地があり、湾に面する平坦地に大小異なる集落が形成されていた。例えば震災前船越が 131 世帯であったのに対して、波板は 23 世帯と少ない。それぞれの集落は、湾に面した平坦地に家屋を築き、それぞれの浜で漁業や農業を営んでいる。このように、雄勝地方の集落は 8 割以上が山林という特異な地形により大小異なる集落が散在し、各集落毎にまとまって漁業や農業を営み生活している。

6. 桃生地方における民家の変遷

その土地の民家の変遷の上に成り立つような復興住宅を設計するため、東北民家史についての草野和夫や小野芳次郎の既往研究を元に調査し、- その 2 - で後述する実測結果と比較することで雄勝の民家の特徴を洗い出した。

東北の民家の原型とされているのが 1700 年頃の広間型と呼ばれる板張りの寝室、座敷、居間（土座）、土間によって構成されたものである。土間に面する居間が大きく取られている点で全国的な農家の一般形とされる田の字型とは異なる。その後の変遷で草野は農家の階級により発展の過程に差異があり、普通層と村役層に分けて考えている。村役層の場合は普通層に比べ平面規模が大きく、発展も先に起こる。普通層には 50 年程経ってから村役層の構成変化を縮小する形で取り入れられる。

1700 年頃から 1800 年頃にかけて広間型に起きた構成変化は大きく二点ある。ひとつは居間が板張りになり室内化され、それまで炊事を行っていた場が居間から土間に移されることで「だいどころ」ができたことであり、もう一点は同時に外付けの縁側（外縁）が見られ始めたことである。

1800 年代にかけての変化には桃生地方では産業の分化が起こり、農業、漁業、農・漁兼業それぞれに対して住まいの構成も違いがみられる。普通層、村役層ともに農業専門に比べ漁業の方が土間の面積が少なく、時代につれて縮小される。漁業専門の民家は土間空間の縮小に伴い、作業小屋が別棟で建てられる。一方で農家では土間に板張りが張り出し、土間と室内空間の一体化が進む。両者にみられる構成変化の共通項は居間が分割され四間取りになり、縁側を側面にまで回したものが現れることである。

今回実測した民家は 1900 年頃から建てられており、図における V 期、VI 期の民家と位置付けることができる。それぞれに増築やリノベーションをした建物もあるが、総じて 1900 年以降の変化を考察すると、土間が消え居室になり全体で六間取りの空間を構成する。近代的な水回りの設備は増築されて付け足されている。

7. まとめ

このような文献による調査と実際の実測結果を比較することにより、以下のような設計における基本的なデザインコードを抽出した。

- ① 八畳間を室のモジュールとしておりこれを踏襲すること。
- ② 漁民住居の変遷の過程で生まれてきた縁側や作業小屋といった、漁業を行なう上で不可欠な空間を必ず設けて計画する。
- ③ 八畳間が連続する構成は親せきなどが集まる時にフレキシブルに一室利用ができるようにする。

- ④ 水回りは基本的に増築により獲得されている室であるが、復興住宅では最初の設計計画に組み込んで計画する。

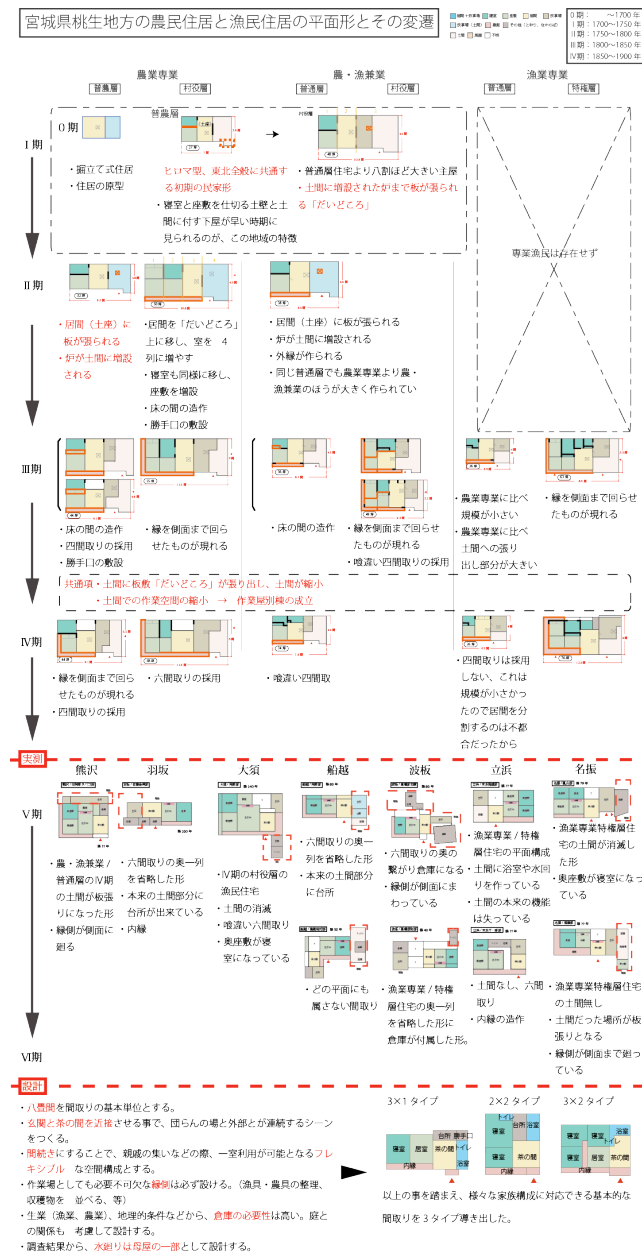


fig. 5 宮城県桃生地方の農民住居と漁民住居の平面形とその変遷^{※8}

5. 参考文献

[1] 小倉強：「東北の民家」，相模書房，1955。
 [2] 小野芳次郎：「東北地方の民家」，明玄書房，1971。
 [3] 草野和夫：「東北民家史研究」，中央公論美術出版，1991。

※1 「東日本大震災について 被害状況と警察措置」：警察庁
 ※2 「東日本大震災 石巻市における被害の概況」：石巻市
 ※3 「石巻市災害復興基本計画 第一章」：石巻市
 ※4、5、6、7 「石巻市雄勝地区 高地移転候補地およびゾーニングのための基礎資料」：雄勝支所
 ※8 fig.5 は草野和夫「東北民家史研究」を元に実測したものの尾を加筆したものである。